

Title	ジョン・ C・ コンドン、斎藤美津子編『何のための異文化間コミュニケーションか』
Sub Title	John C. Condon and Mitsuko Saito eds., "Communicating across cultures for what?"
Author	霜野, 寿亮(Simono, Toshiaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.9 (1981. 9) ,p.130- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810915-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

John C. Condon and Mitsuko Saito eds.

Communicating Across Cultures For What?

a symposium on humane responsibility in intercultural communication

THE SIMUL PRESS, INC., Tokyo, 1976, v+141 pp.

ジョン・C・コンドン、斎藤美津子 編

『何のための異文化間コミュニケーションか』

今日、国際交流の必要性がいたるところで叫ばれており、いまではあまりに当然のこととして受け止められているようである。マス・メディアを媒介とする擬似的間接的経験を含めれば、我々の多くは様々なレベルで現に国際交流に参加しているとも言えよう。ただ、国際交流とは単なる人的往来や物資の移動や技術交換に意義があるのではなく、それらを通して異なる文化（価値・思维・生活・行為様式）との接触をはかり、相互理解を深めることが重要であると考えらるならば、国際交流のあり方は常に問い直されてゆかねばなるまい。国際交流の美名のもとに、異文化に対する理解や尊敬を

忘れ、経済的利益の追求のみを押し進めたり、技術や思想の一方的押し付けによつて政治的支配の構造を作りだしたり、かつての植民地経営や文化的人種の偏見などに代表される人間性の無視を引き起したりすることは、誰の目からみても止めるべきことにちがいない。国際交流ないし異文化間の接触が、交流する者双方にとつて利益をもたらすものでなければならぬことは、言うまでもない基本的前提である。交流をしない状況よりも、異文化間で接触する状況の方が双方に有益であるのでなければ、共に交流を進める意味も、新たに交流を希望する理由も説得力もないことになる。さらに、交流に予期されている利益の中身も問題である。利益の具体的内容が技術的效果や経済的効用にまず目を奪われるのは止むを得ないことではある。しかしながら、異文化間の交流のなかには、精神的というか、人間としての生き方に係わる部分で、それぞれに役立つ何かを与えるものがなければならないはずである。これこそが、交流のもたらす真の利益となるものであらう。だが、かかる利益を得ようとするれば、なぜ、どのように、異文化間の交流を行なうかについての絶えざる議論を避けて通るわけにはいかない。なぜなら、ここの利益の実質には各々の「人間」が顔を出すからである。本書はこれらの点に関する様々な考え方の「国際交流」を目ざしたものと見えよう。本書の内容は国際基督教大学で一九七六年に開かれた、異文化間コミュニケーションにおける人間の責任を問うシンポジウムに基づいている。以下、簡単に内容をみてゆくことにしたい。

本書の主たる内容は五章に分けられており、各主題に関する報告と批評を集めた四章、および自由討論を収録した一章からなっている。そして、これに序文・概説・結語が設けられているという全体構成である。序文ではケネス・E・ボウルディングが、生き残り戦略として異文化間コミュニケーションを捉え、このためには上位体系への文化統合ばかりでなく、危機的状況に対応するための文化的多様性の保持も重要であることを指摘し、さらに文化の貧富差がもたらす問題の無視しえぬことを示唆している。概説ではジョン・C・コンドンと斎藤美津子が、編者の意図は、「何のために“異なる文化の間でコミュニケーションを行なうかを問うことにあり、異文化間でのコミュニケーションを行なう各主体の責任に思いを馳せれば、こうしたコミュニケーションが人間性の問題と深く係わらざるを得ない点を示すことにあるとしている。第一章は「異文化間コミュニケーションへの関心」と題され、「架橋構築に関する覚書」というウィルバー・シュラムの報告から始まっている。それによると、世界には一方で情報の過多があり、他方で情報の過疎が存在しているが、異文化間コミュニケーションに関して言えば、政府と個人が共に責任を持たねばならないとされている。政府についてみれば、情報に対する統制をどうするかが問題となる。どこまで自由な国際コミュニケーションを制度的に認めるか——特に通信衛星の利用に際して——が問題となる。個人に焦点をあてれば、個人の内部で統一化をはかり架橋を構築するゆき方もある。その際に必要となるのは、異文化に対する尊敬の念であり、文化の相対性の認識にはかな

紹介と批評

らない。異文化間コミュニケーションを行なうには、文化的排外主義や異文化無視の態度を克服する必要がある、他者を自己と全く同等なものとする態度を養うには、異なる文化を背負う人々を共通の関心によつて作業させたり、考えさせたりすることが効果的なのである。そして、このような文化間架橋を基礎づけるのは、*care, work, understanding, love* であるとしている。この報告に対して、加藤秀俊は基本的に同意し、異文化間コミュニケーションと同様のことが下位文化間でも起ることを指摘する。また西川潤は、文化的支配が行なわれている状況下では真のパーソナル・コミュニケーションが成立しないとみて、シュラムの考える架橋構築の前に既存の架橋を検討する必要があるとする。さらに、エドワード・C・スチュワートは、情報が特定の社会形態と密着しているがゆえに拒絶されるのを防ぐため、世界共通語の構想を提示している。これら批評に対して、シュラムは、何よりも大切なことは異文化を理解し、許し、異文化に共鳴し、異文化と協同することであると述べている。

第二章は「富者と貧者の間で」と題され、川田侃が「今日の国際関係——コミュニケーションに関する諸問題」という報告をしている。ここで彼が問題とするのは、コミュニケーション技術がもたらした負の側面である。それによれば、情報技術の革新は世界を縮小して人類の統合を推し進め、世界経済の機能的統合をもたらそうとしている。だが通信技術の発達が平和的に統合をもたらすかどうかは疑問である。なぜなら、技術が富者や強者によつてのみ利用され、貧者や弱者との溝を深めるか、あるいは支配の手段として用い

られることもあるからである。通信技術の発展は交流の量的拡大をもたらしたものの、人々の生活様式の統合にみるべき徴候はなく、また「北」を水平的に結びつけることには成功したものの、南北の間では分断されているのである。さらに、東南アジアでは急激な工業化の進展が都市と地方の格差を拡大し、人口移動による都市周辺部のスラム化を促し、富者と貧者の差を拡げる傾向を示している。このような状況下でのコミュニケーション論者の役割は、先進国と発展途上国、多国籍企業と地域中小企業、富者と貧者の間で、いかにコミュニケーションさせるかの挑戦にあるとしている。この報告には、通信技術の発展が先進国によつて支配され、発展途上国を圧迫するために使われたことは事実であるとしても、そうした技術を利用して発展途上の中小国家がその連帯強化を図つたことも否定できないと指摘する中川文雄の批評、発展途上国の人々の生活様式や考え方を配慮した新たな交流モデルの必要性を説くエドワード・T・ホルルの主張、分析視角の多様性のなかでコミュニケーションとは何かを考え、我々がどこへ向うべきかを知るためには、様々な情報チャンネルの利用や異なる人々の直接的コミュニケーションがいかに重要であるかを説くマーチン・コピンの指摘が寄せられている。これに対して川田は、多国籍企業による統合促進というポジティブな側面は認められるとしても、現在ではネガティブな側面の方が多大であると述べて締めくくっている。

第三章は「ひとつの自我、多数の文化」と題され、Y・V・ラックスマナ・ラオが、「異文化間コミュニケーションのディレンマ」と

いう報告をしている。人々が相互理解を深めるには経験や知識を共有することが不可欠であり、マス・コミュニケーションはこの点で大きな役割を果たしうるのだが、送り手が特定社会の一員たざるをえない点に問題がひとつ生れてくるのである。コミュニケーションにおける電子技術の発達はその自体が標準化を意味しているようであるが、一方で文化は多様性を要求しており、ここに、近代化という世界的標準化を生じさせるコミュニケーションの量はどの程度に必要なのか、逆に文化の独自性はどの程度保存されなければならないかの問題が残ることになる。伝統的価値の侵蝕は先進国にも生じているのである。あまりに多くの情報と速い変化に接することにより、人々は自我喪失の状況に追いこまれ、コミュニケーションの送り手自身までが自らの準拠点を見出しにくい事態が出現している。また、発展途上国では情報流入のもたらす取り返しのできない結果を恐れて、情報のフリー・フローに疑問を持ち、なんらかの統制を加え始めている。しかし、そのような統制がいかなる結果に至るかはまだ何もわかっていないのである。数多くの文化に接し選択を行なう通文化的人格が獲得されるためには、情報の不均衡を是正する必要がある。しかも、かかる是正は不均衡に苦しむ人々によつて行なわれなければならない。さらに情報の送り手自身が通文化的にならなければならないとしている。この報告に関連しては、田中靖政が富みかつ情報も豊かな先進国が貧しくかつ情報も乏しい発展途上国を、情報の面でも自立できるよう援助することが、「人間的」であると説き、また、自己の意思の他者への押し付けを禁止する仏教

的伝統のある日本は文化的架橋の役割を果たしうるだろうと述べている。そしてタルシ・サラールは次のように言う。生成変化する文化に人は接してゆくのであるから、異文化間コミュニケーションを考えるときには、異なる文化に個人がどのように反応するのかをじっくり調べるのが大事なのであると。さらに、アリフィン・ペイは、人は文化の捕われ人であると共に文化の改変者であり、人間的であるということは他者を彼らのままに認めることなのであるから、文化間の交流が西洋文化による他文化の没落になつてはならないと主張している。

第四章は「技術のあとを追つて」と題され、ホールが「文化横断的コミュニケーションの文化モデル」という報告を行なつてゐる。

それによると、人間は文化に基づくことにより生活しうるのであるが、文化を人間に役立たせるようにするのも人間自身の仕事である。それには人間が他の文化から学ぶことが必要であり、それゆゑすべての文化は相互に他を必要としているのである。ただし、人間世界のうちには自律と依存という対立する傾向があまねく存在しているので、この両者の間に均衡を保つことが、文化の安定を確保するために不可欠である。特に、技術の持つ予測されざる結果は自律と依存との均衡をくずす点にあるので、技術の利用に際しては、人間が積極的役割を果たせるよう構造化しておくことが重要であるとしている。この報告に対し、シュラムは文化交流のなかで技術が人々の生活に与えた影響の大きさに触れ、ラオは技術導入をある文化が試みる場合、情報交換などにより他の文化が犯した誤りを除去

しうる仕組の存在していることが大切なのであると主張する。また加藤は、生活道具をほとんど持たぬ文化と生活道具のあふれかえる文化を両極に対置し、その中間に生活上の最適点を求めるとともに、情報の流れが後者から前者に偏つてゐる点も問題にしている。これら指摘に答えてホールは、文化や言語や技術や科学知識はそれぞれに体系を構成しているのであり、その内部には利用者の気づかぬうちに大きな影響を与える構造のあることを強調している。

第五章は出席者による討論であるが、発言を遂一要約することまでは不要と思われるので、論点だけを示せば次のとおりである。今日、文化は現に多様性を保持していると考えられるのかどうか。これからのマス・メディアはいかなる役割を果たすべきであるのか。共通言語の役割は何か。文化的対立の指摘自体が事態をさらに悪化させることになりはしないか。現在のコミュニケーション状況が続くとしたら将来の文化はどうなるのであろうか。若者はいかにして異文化と直接接触をはかりうるのであろうか。長期的変化の説明には文化の相連が役立つものの、短期的説明には政策決定や経済計画などとの関連をみなげなければならないのではないか。中東ではどのような国際コミュニケーションの努力が有効なのであろうか。国内の文化的相連も克服できないのに、異文化間のコミュニケーションを論ずるのはおかしいことではないのか。結語は加藤によるまとめであり、このシンポジウムが明らかにした点として、次の二点をあげている。(1) コミュニケーション技術の発展は世界がひとつであるという認識の普及には貢献したが、同時に大事なものは、そのような

ひとつの村に多様な文化と人間が共に住まねばならぬということの確信なのである。(2)他者を理解するには人々との直接的接触を持つことが大切である。知識は読書によっても得られるが、真にわかり合うためには共に経験することが必要なのである。

以上からもわかるように、本書には数多くの考えるべき論点があり、めめられている。この点はシンポジウムの特長であるが、裏返せば、一貫してひとつの論理を展開しているとは言いがたい。それぞれが、それぞれの立場からの発言であるために内容も多岐にわたっており、要約それ自体も断片的にならざるを得なかった。それゆえ、どこまで適切に理解し紹介できたかいささか心もとないのであるが、気がついた点を一、二指摘し筆を置くことにしたい。本書を読み終えて第一に感ずるのは、コミュニケーションの目的を問うことのもどかしさである。「何のためのコミュニケーションか」がシンポジウムの主題であるが、異文化間のコミュニケーションに共通の目標は設定しなければならないのか、また設定が可能なのかどうか、本書に目を通した限りでは甚だ疑問である。なぜコミュニケーションを行なうかについて、もう一步突っこんだ議論があつても良かったのではなからうか。相互理解を必要づける共通認識が曖昧であるために、ここで提示される議論にしても、理念論と手段論が混在しているように思われる。そのせいか論戦はさほどかみ合つておらず、コミュニケーションのあるべき方向について統一見解が示されているわけでもない。なるほど発言者の多くがヒューマニティ概

念に言及しており、これに基づくコミュニケーションの推進という点に合意の成立を認めることができるかもしれない。だが、その内実になると、何がヒューマンなコミュニケーションなのか明確にはなっていないのである。ただ、視点を変えてみるならば、このような議論の姿は異文化間コミュニケーションが現在置かれている状況を反映した結果であるとも考えられる。この意味において、国際コミュニケーションをめぐる様々な問題を知るうえで本書は大いに役立つはずである。また、各研究者の知的基盤を探りながら読むと、それぞれの主張とその文化的社会的背景との関連——たとえば日本人研究者による仏教世界への強い関心など——がうかがわれて楽しいものである。御一読をおすすめる。